

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 村井 聖徳
論文題目 日本語における「自他」と「ヴォイス」の諸問題
論文審査委員 イ・ヨンスク教授、糟谷 啓介教授、尾方 一郎教授

1. 本論文の構成

本論文は、日本語における自動詞と他動詞のありかたを再検討することにより、動詞の自他の区別を「ヴォイス」つまり「態」の現象と相関させて、全体的に考察することにある。本論文の出発点は、日本語の動詞には本当に「自動詞」と「他動詞」という区別があるのだろうかという疑問である。他動詞は助詞の「を」を介して目的語をとる動詞であるという説明では不十分である。なぜなら、「飛行機が空を飛ぶ」の「飛ぶ」は、助詞の「を」をとるにもかかわらず、「空」が行為の帰着点を指すわけではないので「飛ぶ」は自動詞とみなされることが多いからである。しかしこのような説明は、英語のようなヨーロッパの言語を基準にしているのではないかという疑問が生じる。また、他動詞は受動態を作ることのできる動詞であるという説明も、日本語の場合には完全には当てはまらない。ひとつには、無生物主語をとる受動態が「不自然」に感じられる場合があるからであり、もうひとつは、たとえば「昨日私は雨に降られた」のように、日本語には自動詞によって作られる「迷惑の受身」という現象があるからである。著者はこのような問題意識を出発点として、日本語の動詞における「自他」と「ヴォイス」の現象を再定義しようとする。本論文の構成は、次の通りである。

凡例

序論

1. 既存の定義の問題点

- 1.1 近世の研究における「自他」と「ヴォイス」
- 1.2 大槻文彦
- 1.3 山田孝雄
- 1.4 松下大三郎
- 1.5 橋本進吉
- 1.6 時枝誠記
- 1.7 三上章
- 1.8 近年の研究
- 1.9 問題点のまとめ

2. 「項」と「格」から見た「自他」と「ヴォイス」

- 2.1 「項」と「格」

- 2.2 ハ格の扱いについて
- 2.3 「ゼロ格」概念について
- 2.4 項と格の種類と関係
- 2.5 まとめ「
- 3. 動詞の形態論から見た「自他」と「ヴォイス」
 - 3.1 動詞の形態変化の範囲について
 - 3.2 「自他」と「ヴォイス」の混交について
 - 3.3 「受身」について
 - 3.4 「使役」について
 - 3.5 「自動詞」と「他動詞」の対応
 - 3.6 形態論的な「自他」対立の否定
- 4. 「受身」「自発」「尊敬」と「可能」の対立
 - 4.1 「受身」と「自発」について
 - 4.2 「尊敬」について
 - 4.3 「可能」について
 - 4.4 まとめ
- 5. 語形成と「自他」と「ヴォイス」——「ゆでたまご」にまつわる諸問題
 - 5.1 はじめに
 - 5.2 記述的な視点
 - 5.3 受動を示さない理由の考察
 - 5.4 「自動詞」化しない理由の考察
 - 5.5 語順が反転する理由の考察
 - 5.6 まとめ
- 6. 「自他」と「ヴォイス」の通時的検証
 - 6.1 はじめに
 - 6.2 母音と結合法則
 - 6.3 上代とそれ以前の動詞について
 - 6.4 名詞の母音変化について
 - 6.5 四段動詞の已然形と下二段動詞の関連性
 - 6.6 現代に残る基本的な「自他」対応の系統
 - 6.7 まとめ
- 7. 「自他」と「ヴォイス」を統括する上位概念について
 - 7.1 言語における差異の表現手段
 - 7.2 「自他」と「ヴォイス」の上位概念
 - 7.3 言語能力の基礎としての時空間認識

結論

参考文献

2. 本論文の概要

第一章では、日本語の動詞の「自他」の区別と「ヴォイス」に関する先行研究をふりかえり、日本語の文法記述でそうした概念がどのように用いられてきたかを跡づけている。近世国学者の説を概観した後、大槻文彦、山田孝雄、松下大三郎、橋本進吉、時枝誠枝、三上章の諸説をとりあげ、現在もなお重要だと思われる論点を取り出している。しかし、全体として見て、「自他」と「ヴォイス」の分類に関しては、長い間統一的な整理がなされてこなかったことを明らかにしている。そして、「自他」を区別する基準を定めるに際して、語彙的な派生と文法的な派生の区別を見極める必要があることが確認される。

第二章では、「項」と「格」という概念を用いて、「自他」と「ヴォイス」の現象を整理している。文の中で語Aが意味をもちうるためには他の語Bを必要とすることがあり、その場合に、「BはAに対して「項」をなす」と言うことができる。たとえば、他動詞には主語や目的語のような「項」が必要とされる、という言い方ができる。そして、こうした「項」が文の中で果たす文法的役割を「格」と定義する。本論文の用語法に従えば、「日本語で助詞「が」のついた項を「ガ格」、助詞「を」のついた項を「ヲ格」とする」ことになる。著者は、日本語の文のなかで省略できる助詞と省略できない助詞があることに着目する。助詞の省略の現象は話しことばに顕著であり、たとえば「ぼく 今日 学校 行かない」などのような発話は、会話では普通になされる。このような助詞の省略には厳密なルールがあり、「ガ格およびヲ格」とそれ以外の格には大きな性質の違いがあることがわかる。著者はこの点から動詞の性質が分類できると考え、動作の「起動者」「帰着体」「第三者」という概念を導入して、動詞と項、格の関係を整理していく。その結果、自動詞と他動詞の項と格の関係は、受身と使役における項と格の関係と著しく類似していることが観察される。著者は、この両者が同じシステムを共有しているのではないかと推測している。また、移動や経路を表す「を」を伴う「行く」「走る」などの動詞は、一般には自動詞とされるが、この観点から整理すると、他動詞と同じ構造を示すことがわかる。

第三章では、動詞の形態変化の観点から「自他」と「ヴォイス」が検討される。この章では、動詞と項、格の関係から見て、無標の状態から「直接受身」「間接受身」「使役」が派生する過程が観察される。「間接受身」とは、「迷惑の受身」「被害の受身」と名づけられている受身の種類である。無標の状態を基準とすると、「直接受身」では格の関係が変化するが項の数は変わらない。「間接受身」では格の関係が変化し項の数も一つ増える。「使役」でも同様に、格関係は変化しないが項が一つ増える。たとえば、以下のようになる。

無標	暴漢が私の妻を殴る	雨が降る
直接受身	暴漢に私の妻が殴られる	(不可)
間接受身	私が暴漢に私の妻を殴られる	私が雨に降られる
使役	ボスが暴漢に私の妻を殴らせる	雲が雨を降らせる

こうした観察によって、日本語における「自他」の対立と「ヴォイス」の対立は、項と格の関

係で共通の部分をもっていることがわかる。そして著者は、「受身」「使役」は助動詞の使用により体系的に生産できるのに対して、自他の区別は形態論的な規則をもたないことを詳細に論じている。

第四章では、「ヴォイス」に付随する問題として、「受身」「自発」「尊敬」「可能」の表現をとりあげる。検討の結果、「自発」は現代口語においては「受身」の下位区分として整理できること、「尊敬」の使用がしだいに狭まってきていること、「可能」と「受身」の乖離が進み、別々の形態をとる傾向が生まれていること、などが明らかにされる。最後の点は、「直接受身」の使用頻度が高まっていることと相関していると著者は推測している。

第五章では、語形成における「自他」と「ヴォイス」の問題をあつかう。著者は例として、「ゆでたまご」という複合語をとりあげる。著者は、日本語における受身は「その対象の意思に反して何かがなされる」という意味を含んでいるので、「たまご」という意思をもたない「無情性」の対象には、受身が示されないまま語形成がなされると論じる。それに対して、意思をもつ有情物の場合は、たとえば「嫌われ者」のように受身が適用される。

第六章では、「自他」と「ヴォイス」の形態論的特徴が通時的観点から追究される。著者は大野普の研究に依拠しながら、現代日本語では語彙的な対立である「自他」の区別が、歴史を遡れば文法的な対立であった可能性について、さまざまな角度から考察している。章の最後には、上代以前の日本語においては、母音の交替および結合によって「自他」の対応がなされていたが、言語変化を経たために、現在では語彙的区別として残ったという仮説が立てられている。

第七章では、自他の区別とヴォイスは、根本的には人間の認知システムにおける情報処理の問題に還元できるという立場から、仮説として自他とヴォイスを統合する上位のシステムを構築している。それによれば、自他とヴォイスは、形式上の差異から二つのカテゴリーに分かれてはいるが、発話の対象である現象に参与する項の数と、現象のなかでの焦点の位置に対応して切り替えられていると結論づけられている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の第一の成果は、日本語の動詞における自動詞／他動詞の区別を「態＝ヴォイス」の現象と結びつけて包括的に論じたことである。著者は先行研究をよく調べながら、日本語における「自他」と「ヴォイス」に関する問題をつぶさに検討し、一定の枠組みでそれを説明することに成功している。それによって、「自他」と「ヴォイス」という観点から日本語の動詞体系の特徴を浮き彫りにすることができたことは評価すべきである。

さらに本論文の特徴として以下のことが指摘できる。著者は従来の研究を踏まえながら、「自動／他動」「能動／受動」ないし受身、可能、自発等のカテゴリーを、言表を構成する項の数とその性質、ないし「が」「を」「に」といった格助詞で示される格関係の組合せという形に組み直し、新たな認知的枠組みから動詞とその取りうる成分の関係を整理し直すという野心的な試みに取り組んでいる。そしてそれは、動詞変化の区分に対して、例えば自動詞・他動詞といったカテゴリー分類があまり整合性を持たないことを省みて、動詞の新たな分類を目指すという方向に進んでいる。前者の試みは、論理的一貫性の追求として一定の成果を挙げており、包括的な視点

から日本語動詞を整理する可能性をうかがわせるものである。ただし残念ながら、体系的な一貫性を示すためには網羅的に近い検証が必要であるはずだが、例に挙げられた動詞の数が限られているため、このアイデアが一貫して適応しうるのかが必ずしも明らかではない。また論理的に整理しようとする以上やむを得ないことでもあるが、例文の適不適の判断がやや論理的次元に傾くこともある。

また後者の試みについては、動詞活用の研究が戦後になって上代特殊仮名遣いの研究成果を取り入れて精緻化してきたことを受けて、かなり突っ込んだ議論が行われ、かなりの程度まで妥当と思われる説が組み立てられている。ただしこれも難点として、やはり統一的仮説を立てようとするにも関わらず網羅的検証に至らない点、また既に定説に近くなっている部分を中心に参考文献の参照がやや簡略で、独自の立論部分を詳細に示していない点が挙げられる。

けれども、以上の問題点は筆者も十分認識しており、本論文の優れた成果を損なうものではない。著者の議論の展開はきわめて精密であり、ひとつひとつの論点をつぶさに取り上げ、議論をていねい進めていくやり方は、著者の優れた研究能力を証明している。その一方で、著者は言語の基底にある一定の認知システムを仮説として提示しており、その点で本論文はたいへん野心的な試みであると言える。また、本論文には、全体の結論とは別に、きわめて独創的な観察や発見がそこかしこに見られる。総合的に見て、本論文は著者の緻密な論理展開と豊かな発想力が結びついた優れた研究成果であると言える。著者が本論文を基礎にして、さらに研究を発展させることが大いに期待される。

4. 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第 5 条 1 項の規定により一橋大学博士(学術)の学位を受けるに値するものと判断する。

最終試験結果の要旨

平成 19 年 2 月 14 日

論文審査担当者：イ ヨンスク、糟谷 啓介、尾方 一郎

平成 19 年 1 月 26 日、学位請求論文提出者 村井聖徳氏の論文および関連分野について、本学学位規則第 4 章条第 1 項に定める最終試験を行なった。本試験において、審査員が提出論文「日本語における「自他」と「ヴォイス」の諸問題」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、村井氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、村井聖徳氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。